非行を有するハイリスクな青少年の
自殺・自傷行為の理解・予防・対応策に関する包括的な検討

研究代表者　高橋　哲（お茶の水女子大学・准教授）
研究分担者　門本　泉（大正大学・教授）
研究協力者　明星　佳世子（法務省京都少年鑑別所・地域非行防止調整官）
研究協力者　今原　かすみ（法務省大阪少年鑑別所・地域非行防止調整官）
研究協力者　安田　美智子（法務省大阪刑務所・首席矯正処遇官）
研究協力者　宮本　悠起子（法務省名古屋少年鑑別所・統括専門官）

当該年度の研究期間：令和５年４月～令和６年３月（３年計画の２年目）

要旨

本研究は，非行や犯罪を行う青少年の自殺や自殺関連事象等への的確な理解の促進，支援策の充実を図ることを目的に実施するものである。

自傷行為に及ぶ青少年を適切な支援につなげるためにはいくつかの隘路があり，その中に，自殺や自傷行為に関して誤って真実であると信じられている迷信（神話）の存在が挙げられる。こうした神話の存在は，個人の援助希求を躊躇させたり，否定的なスティグマを付与したりする可能性があるため，それらへの対処が求められる。ただし，自殺に関する神話に比べて，自傷行為に関する神話がどのような人に，どの程度信じられているかは定量的には明らかにされていない。

そこで，2 年度目である 2023 年度は，自傷神話の実態と人口統計学的要因の関連を探索的に検討することを目的とし，全国の成人男性 1,000 名，女性 1,000 名の計 2,000 名（平均年齢 44.55 歳（SD=14.31））を対象にウェブ調査を実施した。その結果，「自傷行為の経験を友人や知人に打ち明ける未成年者は非常に少ない」「リストカットをはじめとする自傷行為は，自殺未遂の一形態である」「自傷行為は，精神疾患を患っている人の行為である」「自傷行為の大半はリストカットである」といった神話が半数以上の者に信じられていた。特に，自傷行為に適切に対処できる自信があると報告した者ほど神話を支持する者が有意に多かった。こうした逆説的な結果からは，「良かれ」と思っての支援や対処が，場合によっては逆効果となる可能性を示唆するものであった。さらに，対人援助職としての経験を有することが，必ずしも自傷行為に関する誤った認識を払拭することにつながっているわけではないことも示唆された。これらの結果は，今後の心理教育や啓発活動の設計に大きな示唆を与えると考える。

Comprehensive study on understanding, preventing and responding to suicide and self-injury among high-risk youth with delinquent behaviour

Principal Researcher: Masaru Takahashi（Associate Professor, Faculty of Core Research, Ochanomizu University）
Co-Researcher: Izumi Kadomoto（Professor, Taisho University）
Research Collaborator: Kayoko Myojo (Position, Kyoto Juvenile Classification Home, Ministry of Justice)
Research Collaborator: Kasumi Imahara (Position, Osaka Juvenile Classification Home, Ministry of Justice)
Research Collaborator: Michiko Yasuda（Position, Osaka Prison, Ministry of Justice）
Research Collaborator: Yukiko Miyamoto（Position, Nagoya Juvenile Classification Home, Ministry of Justice）

The Current Research Period：April 2023 to March 2024（2nd year of a 3 year plan）

Summary:
Non-suicidal self-injury (NSSI) is a significant public health concern, and is a common behavior exhibited particularly by adolescents. Previous research has suggested the presence of inaccurate beliefs about suicide and NSSI, and these myths can lead to negative consequences like stigmatization and a lack of support for those who engage in it. An accurate understanding of the prevalence of myths and misconceptions in relation to NSSI is crucial for developing effective prevention and intervention strategies for suicide prevention programs. The purpose of this study is to investigate the prevalence of myths and misconceptions about NSSI among the Japanese public, and the relationship between demographic factors, personal experiences, and beliefs in such myths. The survey was conducted in December 2023. A total of 2,000 Japanese adults, with equal numbers of men and women nationwide, were enrolled in the study through an online research company. The participants were asked to complete a self-reported web-based questionnaire that assessed their beliefs and opinions about self-injury myths. The percentage of endorsement for each myth was then calculated, followed by logistic regression analysis to determine the association between sociodemographic factors, personal experiences, and beliefs in these myths. Results showed that many participants held misconceptions about self-injury, such as the belief that it is a form of attempted suicide, and that it is more common among young women. Female participants were also more likely to endorse such misconceptions. People with experience as human-service professionals were more likely to view self-injury as an attention-seeking behavior. With a few exceptions, those who reported more confidence in their ability to appropriately cope with self-injury were significantly more likely to endorse these myths. These paradoxical results suggest that support based on a one-sided understanding may be counterproductive. Furthermore, the results also suggest that having experience as an interpersonal support worker does not necessarily lead to the elimination of misconceptions about self-injury. This study highlights the importance of debunking these myths and improving the public's understanding of NSSI to prevent suicide.

1. 研究目的

リストカットなどの自傷行為は青少年に広くみられる現象である。自傷行為の中には，死を意図せずに感情調整など一種のストレス対処方略として用いられる場合もあり，自殺と区別して考えることが臨床上有用な場合もあるが，他方，長期追跡研究の結果から自傷行為の履歴は自殺リスクを遥かに高めることが明らかにされており，自殺予防のためにその実態の解明が急務である。

こうした自傷行為の生涯体験率が高い一群に非行少年（少年法上「女子」も含む。以下同じ。）がいる。一般に，非行少年は反社会的であり，他者の権益を侵害する一群とのイメージを抱かれやすいものの，先行研究では，同時に自殺や自傷のハイリスク群でもあることが一貫して指摘されている。彼らの中には，虐待被害をはじめとする小児期の逆境体験，様々な被害体験の既往を抱えているのみでなく，メンタルヘルスの問題を抱えている者が少なくない。しかしながら，ごく最近まで，司法領域では，自殺や自傷は保安上の事故として扱われ，行動科学の見地から検討されることが少なく，多機関が連携し系統的にデータ収集した研究は限られていた。また，非行少年は加害者として専門家の前に現れるため，この一群の自殺問題は，これまで一般医療や心理臨床の文脈で十分な検討がなされてこなかった現状がある。

上記を踏まえ，本研究では，犯罪や非行を行う青少年の自殺や自殺関連事象等への的確な理解の促進，支援策の充実を図るための実証的なデータを得ることを第一の目的とする（研究①）。また，こうしたハイリスクな青少年の一群の他害と自傷に対する一般市民の認識を把握し，その認識と実態との齟齬を明らかにすることを第二の目的とする（研究②）。また，広くハイリスク群の自殺予防に向けた理解と支援の推進のため，関係者や一般市民向けの啓発活動を行うための資料作成を第三の目的とする（研究③）。

2 年度目である 2023 年度は，研究②として，一般市民が自傷行為をどのように捉えているかという点に焦点を当てその実態に関する調査を実施した。自傷行為に及ぶ青少年を適切な支援につなげるためにはいくつかの隘路があり，その中に，自殺や自傷行為に関して誤って真実であると信じられている迷信（神話）の存在が挙げられる。例えば，「自傷行為は注目を集めるためだけに行われる」というものがあるが，これは自傷行為に様々な機能があることを見いだした多くの先行研究と矛盾している。こうした自傷行為に関する神話は，個人の援助希求を躊躇させたり，否定的なスティグマを付与したりする可能性があるため，それらへの対処が求められる。ただし，それらの迷信がどのような人に，どの程度信じられているかは定量的には明らかにされていない。

そこで，本研究は，幅広い年齢層の日本の成人男女を対象に，自傷神話の実態を調査し，その支持の程度を把握するとともに，これらの神話を支持していることと人口統計学的要因，自傷に関する個人的経験との関連を探索的に検討することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査対象者

本研究の調査対象者は，インターネットリサーチ会社である株式会社クロス・マーケティングを通じて募集した全国の成人男性 1,000 名，女性 1,000 名の計 2,000 名であった。後述する不誠実回答者を排除するためのスクリーニングの後，年齢層（20 代，30 代，40 代，50 代，60 代），性別ごとに各セルの目標人数である 200 人に達するまで募集を続けた。調査対象者の平均年齢は 44.55 歳（SD=14.31，range=20-69）であった。

(2) 調査手続

調査は 2023 年 12 月に実施した。ウェブ調査の冒頭画面において自傷や自殺に関する考えを尋ねる調査であることを明示した上で，参加は自由意思に基づくこと，個人情報の保護方針，学会での発表等に関する方針について記載し，回答の提出をもって参加への同意が得られたとみなした。また，回答過程において質問への注意の割り当てが不十分である者を除外するために Directed Questions Scale を使用した。具体的には，調査全体を通じて，回答者に特定の選択肢を選択するよう明示的に求める 3 つの質問を無作為な順序・位置で提示し，いずれか一つでも不正解であった者を調査対象から除外した。

(3) 調査項目①（自傷行為に関する神話）

自傷に関して一般的に信じられているが科学的根拠が乏しい言説を特定するために，先行研究の調査を行った。その結果，先行研究では支持されていない幾つかの通説が同定された。神話と分類するには十分な科学的根拠を欠く項目や，表現が不正確なために誤解される可能性のある項目は分析から除外した。各神話について提示した上で，それらについて，「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの 6 件法で回答を求めた。

(4) 調査項目②（自傷行為に関する個人的経験）

神話との関連を検討するために自傷行為に関する経験についても尋ねた。具体的には，家族・友人・知人に自傷行為を繰り返した人がいる，自傷行為者から告白や相談を受けたことがある，自傷行為を身近に感じている，対人援助職（医師，看護師，教員，心理師，カウンセラーなど）としての勤務歴の有無，周囲の人が自傷行為に及んでいた場合に適切に対応する自信の有無などについて尋ねた。

(5) 調査項目③（人口統計学的変数）

回答者の性別，年齢，配偶者の有無，子どもの有無について尋ねた。

(6) 統計分析

探索的な目的のため，第一に，各神話を支持する者の割合について該当・非該当に二値化して算出した。第二に，各神話の支持の有無を従属変数として，人口統計学的変数や個人的経験に関する変数を独立変数として投入した上で，ロジスティック回帰分析を行い，調整オッズ比を算出して関連を検討した。

倫理面への配慮

研究の実施に先立ち，筆頭著者の所属先の倫理審査委員会の審査で承認を得て実施した(受付番号：2023-135)。ウェブ調査の冒頭において研究目的や個人情報保護等に関する説明文を添え，1 ページ目に目を通した上で回答してもらうよう依頼した。具体的には，研究への参加は自由意思であること，匿名性が担保され個人情報が保護されること，途中撤回して参加を取りやめても差し支えないこと，調査結果は関係する学会などで発表する予定であること等の説明を行った。回答データは完全無記名で，研究者が受領するエクセルデータは数値と記号のみから構成され，個人情報は一切含まれない。調査対象者は，自発的にウェブ調査回答のためにモニター登録をしている方々であり，かつ，調査自体への回答を任意としているので，倫理面の問題は生じないと考える。

3. 研究結果

(1) 神話の支持率

最も多く支持された神話は「自傷行為の経験を友人や知人に打ち明ける未成年者は非常に少ない」というもので 68.7%の参加者が支持していた。次いで「リストカットをはじめとする自傷行為は，自殺未遂の一形態である」という神話に 68.3%の参加者が支持していた。さらに，「自傷行為は自殺につながるので，無理にでも止めなければならない」，「自傷行為の大半はリストカットである」，「自傷行為は，精神疾患を患っている人の行為である」に支持する者が半数近く認められた。最も支持されなかった神話は「自傷行為は心配してほしいがための行為なので，関心を向けないようにすると減少する」であり，支持した者は 21.0%であった。

(2) 神話との関連要因の検討

次に，各神話への支持を従属変数とし，性別，年齢層，自傷行為を繰り返す家族・友人・知人がいた経験の有無，対人援助職の経験の有無，自傷行為者への適切な対応への自信の有無，自傷行為は許されないという考えを持つことを独立変数としたロジスティック回帰分析を実施した。「自傷行為は，めったにみられない現象である」，「自傷行為を繰り返す人は，たいてい一つの方法で行っている」，「自傷行為は，もっぱら刺激を求めて行われる」，「自傷行為の大半はリストカットである」等において，性別の調整オッズ比は 1 より大きく有意であり，男性よりも女性の方がこれらの神話を支持していることが示された。

「自傷行為は，もっぱら刺激を求めて行われる」については基準カテゴリーとした 20 代と比べると他の年齢層の調整オッズ比は 1 未満でいずれも有意であった。逆に「自傷行為は自殺につながるので，無理にでも止めなければならない」は，20 代に比べて 40 代，50 代，60 代でより強い支持が示されていた。「自傷行為は心配してほしいがための行為なので，関心を向けないようにすると減少する」は，20 代と比べると 50 代，60 代で支持する者が有意に少なかった。

対人援助職の経験を有する人は，そうでない人と比べて，自傷行為を精神疾患の症状に帰する傾向が有意に低いことが示された。逆に，対人援助職の経験を有する者のほうが，自傷行為を注目を集めるための手段として認識している者の割合が有意に高かった。また，自傷行為を行う人に適切に対応できる自信があると答えた者は，そうでない者に比べて，幾つかの例外を除き，ほぼ全ての神話を支持する調整オッズ比が有意に高かった。さらに，自傷行為者に対して許せない気持ちを抱いている者は，そうでない者に比べて，全ての神話について支持的に捉えていた。

4. 考察・結論

本研究の目的は，自傷行為に関する一般の人々の態度と知識を調査し，それらが性別，年齢層，過去の経験とどのように関連しているかを探索的に把握することであった。全体として，自傷に関する神話の支持の程度には差があり，あるものは他のものよりも広く支持されていたが，最も少ない項目でも調査対象者の 20%程度が支持していた。さらに，それぞれの神話は，性別，年齢層，個人の経験との関連が見いだせるものもあった。ただし，それらの関連は一様ではなく，神話の内容によって異なることが示された。

先行研究では，男性は自殺神話を信じやすいことが示されている。対照的に，本研究では，女性は男性よりも，自傷行為はめったに起こらない，自傷行為を繰り返す人は一つの方法で行っているといった神話を信じる傾向が強かった。さらに，自傷行為には複数の機能があることを示す多くの研究があるにもかかわらず，自傷行為は自己刺激のためだけに行われるという神話を信じている人は，男性よりも女

性の方が有意に多かった。また，年齢層に着目すると，「自傷行為は自殺行為の一種であり，力ずくで止めなければならない」という神話は，高年齢者層ほど信じる傾向が認められた。逆に，高年齢者層は若年者層よりも，「自傷は構ってほしいという欲求によって引き起こされるものであり，無視すれば減る」，「自傷について話すと自傷を助長することになる」という神話を支持する傾向が低かった。このように，本研究の結果は，神話を信じる度合いが年齢層によって一様に異なるという見方を支持するのではなく，それぞれの神話が年齢層によって異なって信じられている可能性を示唆している。このことは，心理教育や啓発活動の設計において，若年者層と高齢者層を単純に区別することは適切ではない可能性を示唆している。

自傷行為に適切に対処できる自信があると報告した者ほど神話を支持する者が有意に多いという結果が見いだされたことは注目に値する。こうした逆説的な結果からは，自分は自傷行為についてよく知っており対応に自信があると自認している者が，実際には青少年の自傷行為に対して一面的な理解や効果的でない対応をする可能性が高いとの懸念につながるものであり，このことは，心理教育や啓発活動の設計に大きな示唆を与えると考える。

最後に，一般市民の間に広まっている自傷行為に関する誤解を正確に把握することは，自殺予防に向けた効果的な情報提供と心理教育の強化にとって極めて重要である。自傷行為に関する固定観念や一般化を避け，正確な情報を提供することは，将来の自殺リスクが高いとされている自傷行為を行う青少年の理解と支援を促進するために不可欠である。

5. 政策提案・提言

本研究の結果から，自傷行為に適切に対処できる自信があると報告した人ほど，神話を支持，すなわち自傷行為に関する誤った認識を有している傾向が認められた。このことは，「良かれ」と思っての支援や対処が，場合によっては逆効果となる可能性を示唆するものであり，一層の普及啓発や心理教育の工夫が必要である。さらに，本研究の結果は，対人援助職としての経験を有することが，必ずしも自傷行為に関する誤った認識を払拭することにつながっているわけではないことも示唆している。対人援助職であっても，自傷行為に十分な知識を有しているとは言い難いことを踏まえると，その養成課程において，自傷行為背景因子，機能，メカニズムとその複雑さを理解し，効果的な介入を行うための，一層の訓練が必要であると提言できる。

次年度の研究では，これまで得られた知見を整理した上で，一般市民や専門職への啓発活動や心理教育の在り方に焦点を当てて検討を行う予定である。

6. 成果外部への発表

(1)　学会誌・雑誌等における論文一覧（国際誌 1 件，国内誌 0 件）

Takahashi, M., Imahara, K., Miyamoto, Y., Myojo, K., & Yasuda, M. (2024). Association between the Big Five personality traits and suicide-related behaviors in Japanese institutionalized youths. Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports, 3, e186.

(2)　学会・シンポジウム等における口頭・ポスター発表（国際学会等 1 件，国内学会等 4 件）

高橋 哲・門本 泉（2024）．自傷行為の神話への信奉と関連要因の検討．青少年問題学会第 2 回大会．2024 年 3 月 17 日（口頭発表）

高橋 哲・今原 かすみ・宮本 悠起子・明星 佳世子・安田 美智子・門本 泉（2023）. 非行を有する青少年の非自殺性自傷行為の態様・機能に関する性差の検討. 日本犯罪心理学会第 61 回大会. 2023 年 9 月 23 日（ポスター発表）

高橋哲（2023）自傷と他害を考える（企画・司会）. 日本犯罪心理学会第 61 回大会. 2023 年 9 月 23 日（全体シンポジウム）

高橋哲・宮本悠起子・明星佳世子・安田美智子(2023). 非行を有する青少年の自傷行為と援助要請に関する探索的検討. 日本心理臨床学会第 42 回大会（ポスター発表）. 2023 年 9 月 1 日

Takahashi, M., Myojo, K., Imahara, K., Miyamoto, Y., Yasuda, M., Kadomoto, I. (2023). Relative contribution of childhood adversity to suicide attempts and suicidal ideation among youth offenders, ASCAPAP 2023 in Kyoto -The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions. Kyoto International Conference Center. 2023 年 5 月 27 日

(3)　その他外部発表等

なし

7. 引用文献・参考文献　なし

8. 特記事項

(1) 健康被害情報　なし

(2) 知的財産権の出願・登録の状況　なし